

## 二柱の天照大神と饒速日尊の謎に迫る！

〈元伊勢研修より得たもの〉（前編）

出口 恒

私たちは平成二十一年九月二十日午後一時より、日本の二大神都のひとつ亀岡「桑田の宮」で、「神々のルーツの謎に迫る元々めぐり」を実施しました。偶然にも一九二一年九月二十日午後一時は本宮山神殿破壊の日時であり、『霊界物語』序文の記された、即ち最後の審判が開かれたと想定される日時。その日は切り紙神示により預言されていた。

そして引き続き十月に役員会主催で元伊勢研修「二柱の天照大神と饒速日尊の謎に迫る」を実施し、さらに研鑽を深めてまいりました。

私たちがなぜ、今回のテーマ素盞鳴尊の御子神とされる饒速日尊に注目したかといえます

と、出口王仁三郎聖師の「王仁は饒速日だ！」という『新月の光』に記された宣言にあります。「饒」とは中国語で「満ち足りて多い」。「饒速日」とは、満ち足りて豊かな光（日）が速く昇ることを示します。ライジングサン・太陽神の名そのものですね。「言霊学上より見る日の本

本の日は、則ちスにしてスの本の国なり。故に日の本はスの本なるの意義を知る可し。」（物語七十四卷二章）

出口聖師はスの拇印を持ちま

す。スとは日・太陽を意味します。「王仁は饒速日だ！」は、自身が太陽神であることの宣言だったのです。スの母音を持つ聖師は、霊国にあつては月ですが、天国にあつては太陽と顕現されるのでしよう。

さらに大正八年三月十一日の神諭には、「良の金神大國常立尊変性男子の身魂が、竜宮館の地の高天原に現はれて、五六七の神政の御用を致さす、天照彦之命の憑りて居る、変性女子の身魂の言霊幸彦命の手を借りて、何彼の神示を書きおくぞよ。」

ここで、五六七神政の御用をなす天照彦は変性女子出口聖師であるとされています。天照彦は「アマテラスヒコ」にふさわしいと考えます。

王仁は饒速日だ！

「饒速日尊は十種の神宝、二岐命は三種の神器をもらわれた。王仁は饒速日だ。十種の神宝は天の数歌の一三三四五六七八九十のことで、十種は十曜だから王仁は十曜の紋をつける。経の万世一系と緯の万世一系と揃うのが世界十字に踏みならすことだ。○に十の紋は裏の紋だ。開祖は御所の中に入って守護すると、いつも言っておられた。世界統一（道義的）は横の万世一系の役。これがなければ経の万世一系だけはいかぬ。（饒速日尊と二岐命『新月の光』上巻）」

旧事記によれば、十種の神宝は「天璽瑞寶十種」であり、王仁三郎聖師が瑞御魂である証ではないかと思えます。

「(○)でも天地は経緯だから、



天照国照天火明  
櫛玉饒速日尊

経と緯にきまつている。紅卍でも白卍でも妙見でもこれは先を尖らしているだけの違いだ。大本も○に十だ。仏教もキリスト教も皆そうだ。十というものは天地の数だ。まるいのは世界だ。大本は周囲に○がある。まるの中に十、それを具体化して○を十拵えた。どの宗教でもこれは当たり前だ。十から皆作っている。経と緯、火と水だ（出口王仁三郎氏に拳国更正を聞く『昭和』昭和八年二月号）。



天磐船神社ご神体巨石

の「十」に人の形の「大」。十字架に架けられた、死（お隠れになること）と復活神話のあるイエス・キリストのようでもあり、贖い主素盞鳴尊のようでもあり気になりますね。

### 国常立尊と饒速日命

「国常立尊は天照大神の元であるが、下に降って働かれるのである。総理大臣がしつかりしているから治まるのである。天

照大神は国常立尊の御分身である。饒速日尊はニ岐尊の兄様であるが、先に十種の神宝をもって大和にお降りになって、用意をされていたのであるが、神武天皇がお降りになった時におしらべになって天津日子のしるしのあるのを見てお譲りになったのである。十種の神宝を持った人が下に降って働かれるから、神武天皇の御位が保たれるのである。その上にあつて陛下は知るし召さるればよいのである。（『新月の光』下巻）

饒速日命は物部氏の祖であり、物部の後継者が初代神武天皇から四十代天武天皇まで、政治・祭事の両権威を掌握していたことが、先代旧事本記訓註付録に記載されています。これは総理大臣の職掌を意味しているのでしょうか。

大物主神・饒速日尊は神武天皇の御父神

『日本書紀』神武天皇即位前記に「日向の国に（神武）天皇がおられた頃、塩土老翁に聞き、「東に美き地あり、青山四周り、その中にまた天磐船に乗りて飛び降る者有り」、その飛び降るといふ者は、これ饒速日と謂いか」の記事があります。

さらに「長髓彦すなわち、行人を遣わして天皇に言して申さく、「昔、天神の子有しまして、天磐船に乗りて天より降り止でませり。名付けて櫛玉饒速日尊と申す。これ吾が妹、三炊屋姫、またの名を長髓姫、またの名鳥見姫を娶りて、ついに御子あり、名を可美真手命と申す。故、吾饒速日尊を以つて君として奉へまつる」

櫛玉は奇霊または、奇魂を

意味すると思えます。饒速日尊はその末娘が伊須気依姫とされています。一方、古事記の神武記には、美和（三輪）之大物主神の御子神である伊須気依姫が神武天皇の皇后となったという記載があります。これは、饒速日尊が大物主神であり、神武天皇の妻の御父神であることを示します。

『記紀』では、大国主神と国造りを行っていた少彦名神（『靈界物語』では後のイエス・キリスト）が常世の国に去り、大国主神がこの国をどうしていけばよいか思いを巡らしていた時、海の向こうから光輝いてやってくる神様が表れ、大和国の三輪山に自分を祭るよう希望しました。光輝は太陽を想起させますね。

大国主神が「どなたですか？」と聞くと「我は汝の幸魂奇魂なり」と答えたといひます。この神が奈良の三輪山に御鎮座し、大物主神と呼ばれるようになりました。

亀岡の出雲大神宮は大国主尊をお祭りしていますが、私たちが唱えた言葉が、「幸御魂、奇御魂」です。出雲大神宮でお祭りしている神は、日本最古の神社大神神社と同じく大物主神・饒速日尊なのだと思います。

#### 天璽瑞寶十種の由来

先代旧事本記『天皇本記上』には、物部氏の祖、神饒速日命が天神御祖より授けられた宝は、羸都鏡一、邊都鏡一、八握劔一、生玉一、死反玉一、一、足玉一、道反玉一、蛇比禮一、蜂比禮一、品物比

禮一が「天璽の瑞宝十種是なり」とされていひます。「天神教導く、汝命この瑞宝を以ちて豊葦原の中津国に天降り坐して御倉棚に鎮め置きて蒼生の病疾の事あらばこの十種の瑞宝を以ちて一二三四五六七八九十と唱へつつ布瑠部由良由良と布瑠部かく為しては死人も生反らむ。即ち是布瑠の言本なり。その二鎮魂祭の日」は、猿女の君等、百歌女を率いてその言本を挙げて神楽を歌舞は、もつともその縁なり。」

旧事本記では、饒速日を「布瑠御魂・大歳尊」とされておひます。

#### 永遠に鎮めの祭りを行え

先代旧事本記『天孫本記』には饒速日の『日本書紀』での記述に漏れている鎮魂祭を含む部

分が掲載されていますので要約します。

「天孫・邇邇芸命の孫の磐余彦尊神武天皇は天下を治めようと、軍をおこして東征したが、命令に従わない者たちが蜂のように起こった。中州の豪族・長髓彦は、饒速日尊の子の宇摩志麻治命を推戴して、主君として仕えていた。天孫東征に際しては、「天神の御子が二人もいる訳がない。私は他にいることなど知らない。」といい、防戦したので、天孫の軍は勝つ事ができなかった。このとき、宇摩志麻治命は舅の謀りごとには従わず、戻ってきたところで長髓彦を誅殺し衆を率いて帰順した。

天孫は、宇摩志麻治命に詔して言った。「長髓彦は性質が狂っている。兵の勢いは勇猛で

あり、敵として戦えども勝つ事は難しかった。しかるに舅のはかりごとによらず、軍を率いて帰順したので、ついに官軍は勝利する事ができた。私はその忠節を喜ぶ。」そして特にほめたたえ、神剣を与えられた。この神剣は、布都御魂（ふつのみたま）（旧事記訓註付録系図ではスサノオの父神）の剣。また、宇摩志麻治命は、天神が饒速日尊に授けた天璽瑞宝十種を天皇に奉った。天皇はたいへん喜ばれてさらに寵愛を増された。宇摩志麻治命は、天物を率いて逆賊を斬り従え、また、軍を率いて海内を平定して復命した。

磐余彦尊は、役人に命じてはじめて宮処を造られた。辛酉正月庚辰の日に、磐余彦尊は橿原宮に都を造り、はじめて皇位につかれ、この日を皇紀元年とし

た。妃の媛（ひめ）足（た）踏（た）鞆（ら）五十鈴姫命（いすずひめのみこと）を立てて皇后とした。皇后は、大輪の神（註・大物主）の娘。宇摩志麻治命がまず天の瑞宝をたてまつり、また、神盾をたてて齋き祭った。……宇摩志麻治命は十一月朔庚寅の日に、はじめて瑞宝を齋き祀り、天皇と皇后のために奉り、御魂を鎮め祭つて御命の幸福たることを祈つた。鎮魂の祭祀はこの時に始まった。天皇は宇摩志麻治命に「お前の亡父の饒速日尊が天から授けられてきた天璽瑞宝をこの鎮めとし、毎年仲冬の中寅を例祭とする儀式を行い、永遠に鎮めの祭りを行え。」とみことりのりされた。

子々孫々代々（まつりごと）政事を継げ  
皇紀二年春二月甲辰朔乙巳の日、天皇は功績を定めて、賞を

行った。宇摩志麻治命に詔して、「お前の勲功は思えば大なる功である。公の忠節は思えば至忠である。このため、先に神霊の剣を授けて類いない勲功を崇め、報いた。いま、股肱の職に副えて、永く二つとないよしみを伝えよう。今より後、子々孫々代々にわたって、必ずこの職を継ぎ、永遠に鑑とするように」と言われた。この日、物部連たちの祖・宇摩志麻治命と大神君の祖・天日方奇日方命（あまひかたのひかたのみこと）は、ともに政事を行う大夫になった。その天日方奇日方命は、皇后の兄。（政事を行う大夫とは、今でいう大連・大臣をいう。）

上記の文章では、長髓彦を誅した宇摩志麻治命は、冷徹な印象を受けますが一方、「耶馬台国の長髓彦と兄、安日王が神武

天皇の東征軍に敗れて東北に落ち延び、津軽の国にアラハバキ王国を建設した」との民間伝承もあるようです。

#### 宮中に今も続く鎮魂祭（たましずめのまつり）

宮中に今も鎮魂祭はあるか私は調査しました。以前は旧暦十一月の二度目の寅の日に行われていましたが、太陽暦導入後は十一月二十二日に行うとされています。

「宇摩志麻治命は十一月朔庚寅の日に、はじめて瑞宝を齋き祀り、天皇と皇后のために奉り、御魂を鎮め祭つて御命の幸福たることを祈った。」

私は物部氏の本拠地であり、大和政権の武器庫としての役割も果たしてきた日本最古設立の神宮で、配祀として宇摩志麻治命を祀る石上神宮（いそのかみじんぐう）に注目しま

した。石上神宮は天理市布留町布留山です。布留御魂神饒速日尊を實際の主祭神とする石上神宮での鎮魂祭が皇室と同じ十一月二十二日なのです。そして天皇家と同じ翌日十一月二十三日に新嘗祭が行われます。

饒速日の霊と一体になる天皇

大嘗祭は、天皇が即位の礼の後、初めて行う新嘗祭。一代一度限りの大祭であり、実質的に即位の儀式。踐祚大嘗祭とも呼びます。歴代天皇は、石上神宮の時と同じ十一月二十二日に饒速日の鎮魂祭を行って、太陽神の子孫である天皇の魂の活力を高め、翌日十一月二十三日に新嘗祭を行い、即位の年には、大嘗祭を行います。戦後は新嘗祭の日は「勤労感謝の日」とし



石上神宮鎮魂祭 11月22日



平成天皇大嘗祭 1990年11月23日

神武天皇王朝と饒速日尊  
聖師は「神倭伊波礼毘古命から今の方まで神武天皇である」(神倭伊波礼毘古命「新月の光」下巻)とされています。神武から現在まで「大物主神・饒速日尊」を鎮魂祭によりお祭りし、饒速日尊が歴代の天皇と一体となる大嘗祭が継続していることから「今の方まで神武天皇」なのだと考えます。

(次号に続く)

て、国民の祝日とされました。天皇即位の儀式とは、前日に饒速日に宮中に鎮まってもらい、翌日の大嘗祭で皇太子が饒速日の霊と一体になることで天皇になるのではないかと思います。饒速日の正式名は、「天照国照彦天火明櫛甕玉饒速日尊」。太陽神にふさわしい名を持つのです。宇摩志麻治尊と神武天皇との間の約束、「宮中

で天璽瑞宝……饒速日尊の鎮めの祭り」を毎年永遠に行うという約束は現在の鎮魂祭という形でまだ生きているのです。冒頭の神霊界では、変性女子に「五六七の神政の御用を致さず、天照彦之命」が懸かっていると表現されています。天照国照彦である饒速日尊と天照彦之命は同神だと思えます。

